



fig. 572 SB06・07・08

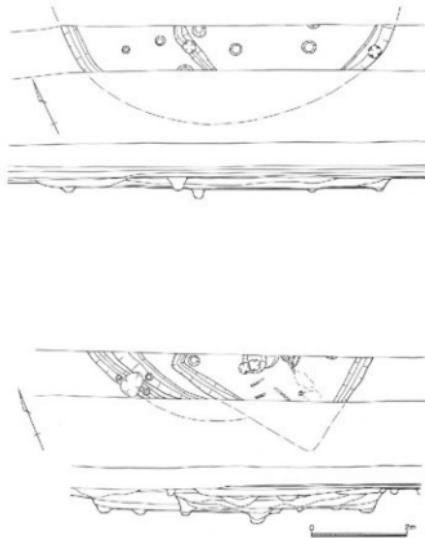


fig. 573 整穴住居平面・断面図(上:SB05 下:SB06・07・08)

SB05 直径6.7m以上(推定8m前後)の円形の整穴住居である。深さ約25cmで、周壁に沿って幅約30cmの周壁溝を巡らせている。床面において7基のピットを検出したが、主柱穴の特定には至らなかった。ただP-2は、約45cmで他より深く主柱穴の可能性もある。埋土から弥生時代後期の土器片が少量出土した。

SB06 南西隅と東側で検出された周壁から推定される建物の規模は、東西辺約4.5mでやや狭く、第7次調査検出のSB01の様な長方形のプランを持つ整穴住居の可能性もある。火災で焼失したと考えられ、床面が加熱によって赤変し、炭や灰が堆積し、炭化材が検出された。床面には南西隅と、中央でピットが検出された。いずれも30cmを越える深さがあり、主柱穴の可能性がある。床面直上で小型丸底壺の破片が出土しており、古墳時代前期の時期が考えられる。

SB07・08 SB06によって切られ、その一隅が検出されただけで規模は明らかではない。幅約30cmと約40cmの切り合う周壁溝が2条検出された。埋土から弥生時代後期の土器片が出土した。おそらく建て替え拡張された円形の住居址かと考えられる。

SB09 周壁に沿い幅約1.2mのベッド状遺構を巡らす整穴住居である。周壁の遺存度は約30cmである。柱穴は検出されなかった。埋土から弥生時代後期の土器片が出土している。円形かと思われるが、SB01に切られ、わずかに検出されたのみで規模も明らかではない。

SD14 幅約80cm、深さ約60cmの断面U字状の溝である。溝底は北西から南東に傾斜し、砂とシルトが堆積していた。埋土より弥生時代後期の土器片が出土した。当時期の集落内の排水に機能していた溝と考えられる。

D-III・IV区では、中世のピット75基と溝3条を検出した。これらの遺構はD-III区西端で検出されたSD15以東で検出されている。

掘立柱建物 SP24のように柱を抜き取った後に土師器小皿をいれた柱穴や、SP49のように柱穴掘形を小石で固めた柱穴が検出された。限られた調査区では、建物として完結するものは見出せなかったが、数棟の掘立柱建物が存在しているものと考えられる。これらの柱穴や溝からの出土遺物から、11世紀末頃から12世紀前半頃の集落の存在が窺える。

2トレンチ 全長40mの南北トレンチである。このトレンチでは弥生時代後期から古墳時代前期の遺物包含層は存在せず、中世の遺物包含層と小穴が数基検出された。基盤層も黄灰色砂質土から灰色砂礫層に変わり、1トレンチよりもやや低くなりつつある。このあたりから谷地形へと変化する可能性がある。

3トレンチ 南北約160mのトレンチである。洪積段丘の西端に位置するトレンチである。このトレンチでは、段丘から沖積地への落ち際の斜面か、沖積地に位置しているため検出された遺構は少ない。

北端にあるA-I区では、中世の遺物包含層とピット10基を検出した。北に行くにつれて傾斜は強くなる。また、A-II区およびB-I区では砂礫層の堆積が認められ、沖積地となる。このためA-I区では、段丘がわずかに西側に張り出し、小規模な掘立柱建物が存在したようである。

SB10 C-I区でも段丘が西側に張り出し、3トレンチと7トレンチの接続部付近で古墳時代前期の堅穴住居SB10を検出した。

C-I区南端からD-I区にかけて再び傾斜し、砂礫層の堆積となる。この段丘と沖積地の境には幅約8m、深さ約70cmの弥生時代終末期から古墳時代前期の溝(SD16)が検出された。これは、1トレンチD-I区東端で検出されたSD04と同じ溝である可能性が高い。いずれも段丘と沖積地の境に掘られた溝である。このSD16の南側D-I区でもピット4基と土坑1基が検出されたが、詳細な時期は不明である。

4トレンチ 字塚町にある全長80mの東西トレンチである。I区以西は、沖積地(後背湿地)にあたるが、この地点には小さな微高地が存在する。このことは圃場整備事業が行われる以前の水田地形からも窺える。調査の結果、溝4条と木棺墓(SX01)1基、土坑1基、ピット9基が検出された。いずれも弥生時代終末期から古墳時代前期のものである。

SX01 掘形は、東西幅約1m、南北長約2.6mで垂直に近く掘り込まれ、底は平坦に整えられ木棺が納められていた可能性がある。南端には、土師器二重口縁壺と甕が供獻されていた。このSX01から南へ約3.5mの所に幅約1.2m、深さ30cmの溝があり、北側約9mの所にも同様な溝が存在する。この溝の間約15mは、周辺より約20~25cm程度高くなっている、墳丘墓の可能性もある。

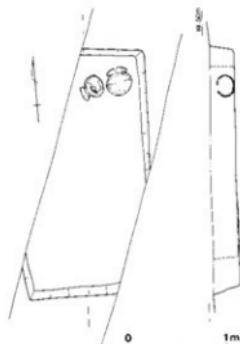


fig. 574 SX01 平面・断面図

- 5 トレンチ** 東西150mのトレンチである。調査地内では最も高所にあたるA-IV区（標高28.5m）には、14世紀代の方形の石の詰まった土坑1基と奈良時代の土坑1基が検出された。A-III区は、この高所からの急斜面となり、A-I区の沖積地へと落ち込む。この間、遺構、遺物は確認されなかった。
- 6 トレンチ** 全長45mの東西トレンチである。安定した洪積段丘面を検出したが、後世の削平が激しく遺物包含層は全く遺存せず、時期不明の幅約1mの溝が1条検出されたのみである。
- 7 トレンチ** 段丘上を東西に跨く約100mのトレンチである。C-I区で竪穴住居(SB10)1棟と中世の溝1条を検出した。
- SB10** 南西隅の一角を検出した方形の竪穴住居である。周壁の遺存度は約25cm程度で、周壁に沿って幅約20~25cmの周壁溝を巡らせており、柱穴は検出されなかった。埋土より古墳時代前期の土器片が出土した。
- SD22** C-II区以東では、徐々に高くなるが、その分後世の削平が激しくなり、遺物包含層はなくなる。C-II~III区にかけてトレンチにはほぼ平行する幅約1.7m、深さ約30cmの溝(SD22)が1条検出された。埋土中より13~14世紀の須恵器、土師器片が出土した。
- 8 トレンチ** 南北約30mのトレンチであるが、後世の削平が激しく遺物・遺構は検出されなかった。
- 9 トレンチ** 東西60mのトレンチで、C-IV区中央で十数基の中・近世のピットを検出した。C-IV区東端から以東へは、徐々に下がっており、段丘の東端にあたるものと考えられる。
- 3.まとめ** 今回の調査は、污水管布設に伴うもので幅約1mの調査となったため、検出された遺構個々の規模や性格は充分に明らかにすることはできなかった。しかし、全長830mにおよぶトレンチを遺跡地内に縦横に設定することができ、同地点の遺跡の広がりと、旧地形の復元が概ねできた。
- 弥生時代後期から古墳時代前期にかけての旧地形と遺跡の広がりを復元すると、この地点の洪積段丘は、II~IV区中央にかけての東西幅約110~130mにあたり、舌状に張り出す段丘の南縁部にあたるC-II、D-II・III・IV区(約7,500~8,500m²)を中心当時の集落が営まれていた。
- I区以西は、沖積地(後背湿地)にあたり、段丘との境に溝を設けている。また、字塚町のE-I、D-I区では、沖積地(後背湿地)の中に南北約80m以上の微高地が存在している。この微高地上には、墓域が営まれていた可能性がある。この微高地と洪積段丘の境には、数条の自然流路が存在し、これに手を加えた幅約9mの溝(SD20)が存在している。
- このように安定した洪積段丘上には、集落が形成され、沖積地(後背湿地)の中の微高地上には、墓域が営まれいた可能性が窺えるが、その形成は、弥生時代後期にはじまり、古墳時代前期まで続くがこれ以降は続かない。
- 今回の調査結果では、11世紀末から12世紀前半に至って段丘上のD-III・IV区で集落が形成され、13世紀から14世紀には、現在の集落内で遺構が検出される。このことから、13世紀から14世紀には、現在のように段丘上にまで耕作地を広げていく過程が窺え、今日の集落形態の基盤がこの頃にできていたものと考えられる。

IV. 平成7年度の大規模試掘調査

概要

神戸市では、各種開発・造成工事に伴い、埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。主として、住宅建設等に伴う小規模な試掘調査は、今年度は249件であった。それ以外に、大規模な地形変更を伴うものとして、土地改良事業（圃場整備）および土地区画整理事業などがあり、毎年広範な地域で試掘調査を実施している。これらの試掘調査によって、新たに発見される遺跡があるのはもちろんあるが、周知の遺跡でも、その範囲内での遺構の状況等が明確になり、遺跡のより詳細な内容が把握できるようになってきている。

平成7年度に実施した大規模土地変更に伴う試掘調査は、土地改良事業に伴うものとして北区淡河町南僧尾地区、北区野瀬地区、北区勝雄地区、北区八多地区、西区菅野地区の各土地改良事業がある。

南僧尾地区では、中世の遺物包含層と遺構が確認され、野瀬地区では、サヌカイト片や平安後期から鎌倉時代の遺物包含層・遺構が確認された。

勝雄地区では、弥生時代から鎌倉時代までの遺物が出土する良好な包含層とともに、遺構を確認した。遺跡は、淡河疎水の東にあたる緩斜面から平地のほぼ全域に広がるものと思われる。淡河八幡・天満神社周辺、田中付近に遺跡の中心がある。

菅野地区では、中世の遺物包含層・遺構の他に、弥生時代中期の土器や平安時代前半の遺構、古墳時代末の火をうけた土坑などが確認された。2面の遺構面の存在が推定されている。

試掘調査は、基本的に平面2mの方形で設定し、バック・ホールまたは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平面・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレンチ調査で確認している場合もある。

大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
南僧尾地区圃場整備事業	南僧尾	103	400 m ²	中世の遺物包含層・遺構、近世遺物
野瀬地区圃場整備事業	野瀬	118	270 m ²	サヌカイト片、平安後期～鎌倉の土師器・須恵器・鉄釘・近世陶器・柱穴・溝
勝雄地区圃場整備事業	勝雄	247	624 m ²	サヌカイト片、弥生土器・奈良～鎌倉時代の遺物、中世の遺構
八多地区県営圃場整備事業	附物	13	52 m ²	中世遺物包含層・遺構（柱穴、ピット）
菅野地区土地改良総合整備事業	菅野？	12	36 m ²	弥生中期土器、6c末～7c初の土坑、平安前半の遺構、中世須恵器・土師器・柱穴

凡例



試掘調査
対象範囲



試掘調査
地点



遺跡存在
範囲

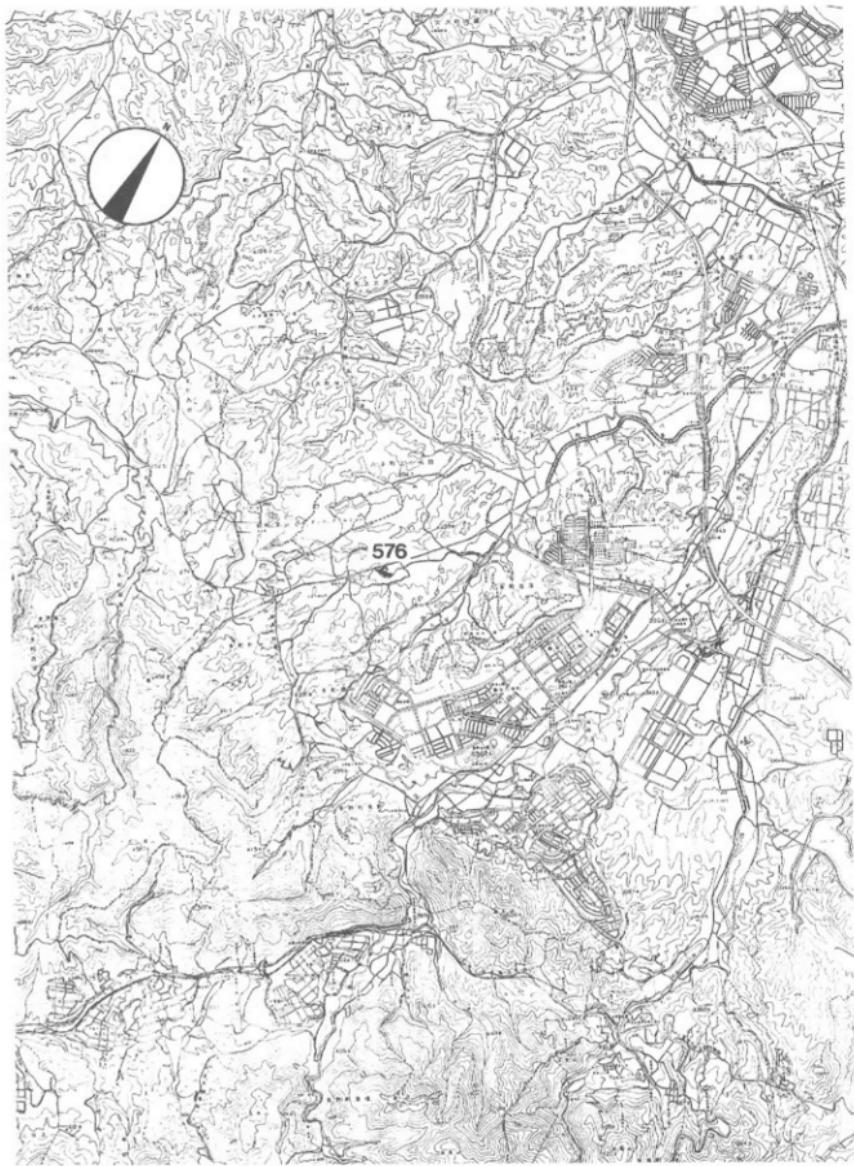


fig. 575 北区試験地域全体図(1)

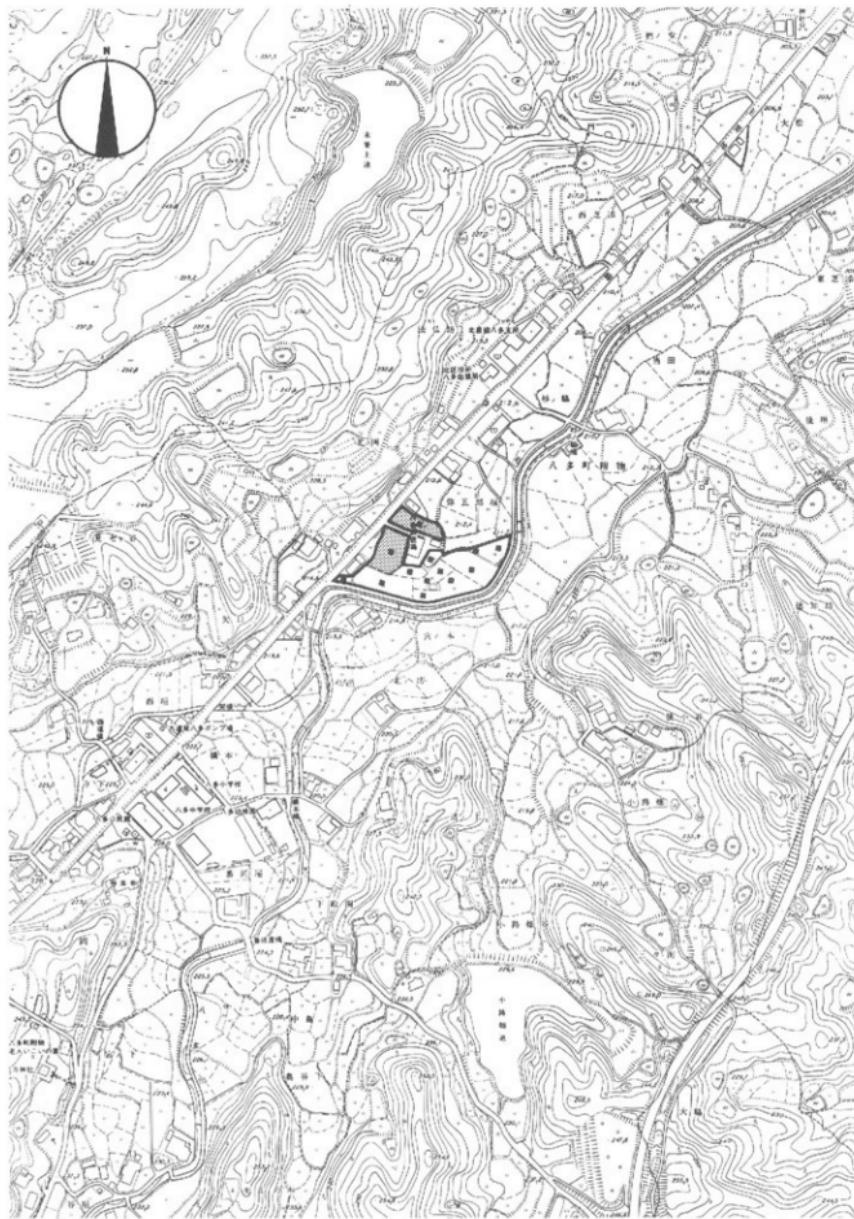


fig. 576 八多地区試掘調査地点 ($S = 1/5,000$)

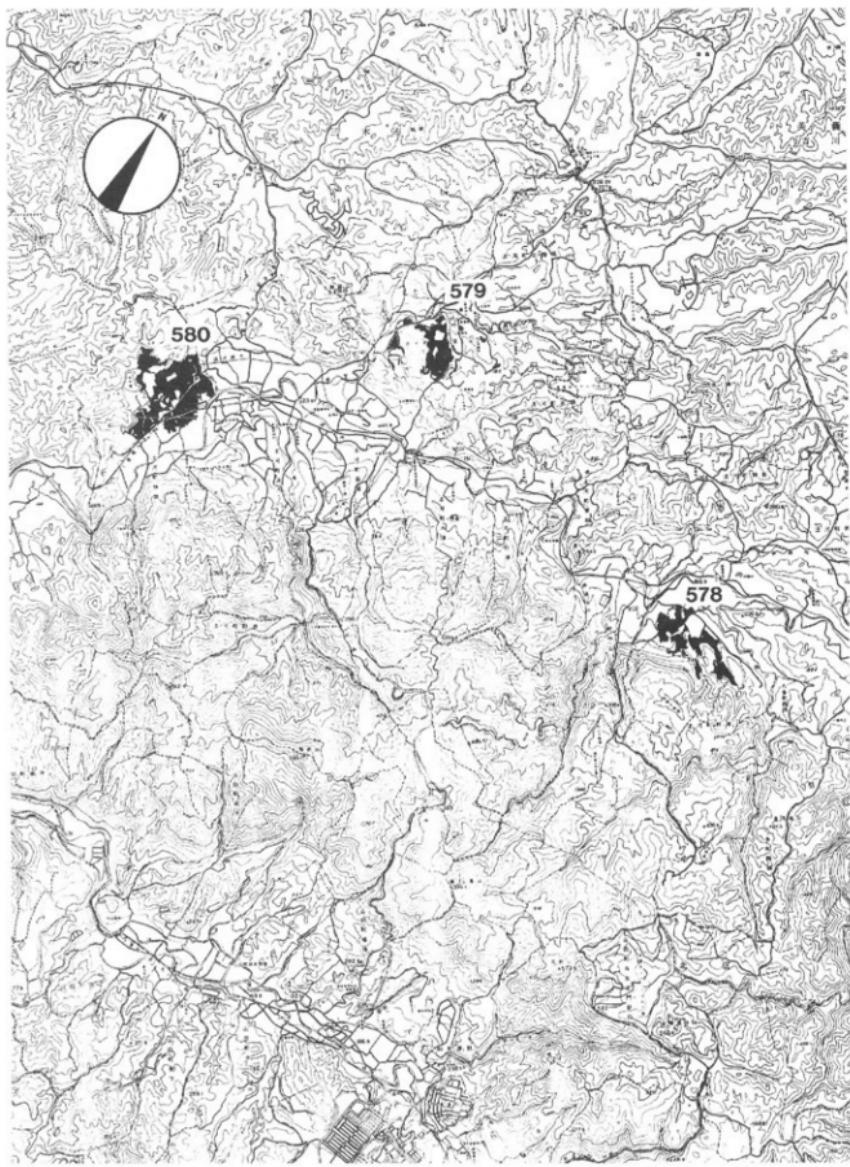


fig. 577 北区試験地域全体図(2)

fig. 578 野湖地区试验调查地点 ($S = 1 / 5,000$)



Fig. 579 南偏尾地区试验调查点 ($S = 1/5,000$)





fig. 580 勝雄地區試掘調查地點 (S = 1 / 5,000)

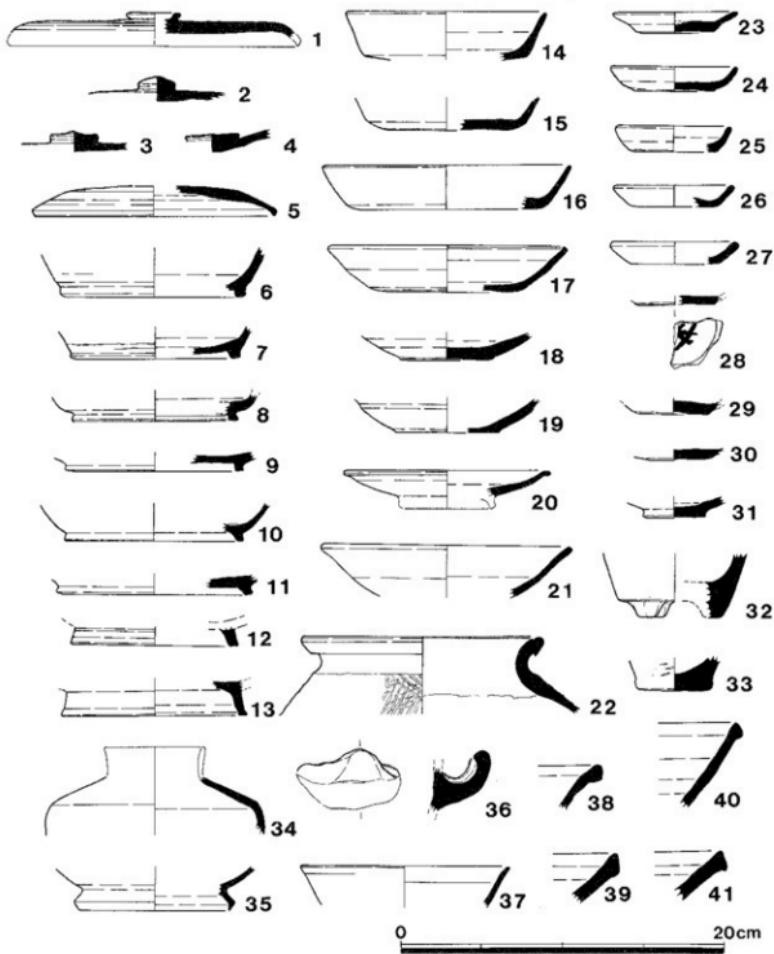


fig. 581 畠雄地区出土遺物 (32:瓦質土器 33:弥生土器 36:土師器 37:白磁 42:開元通宝 その他:須恵器)

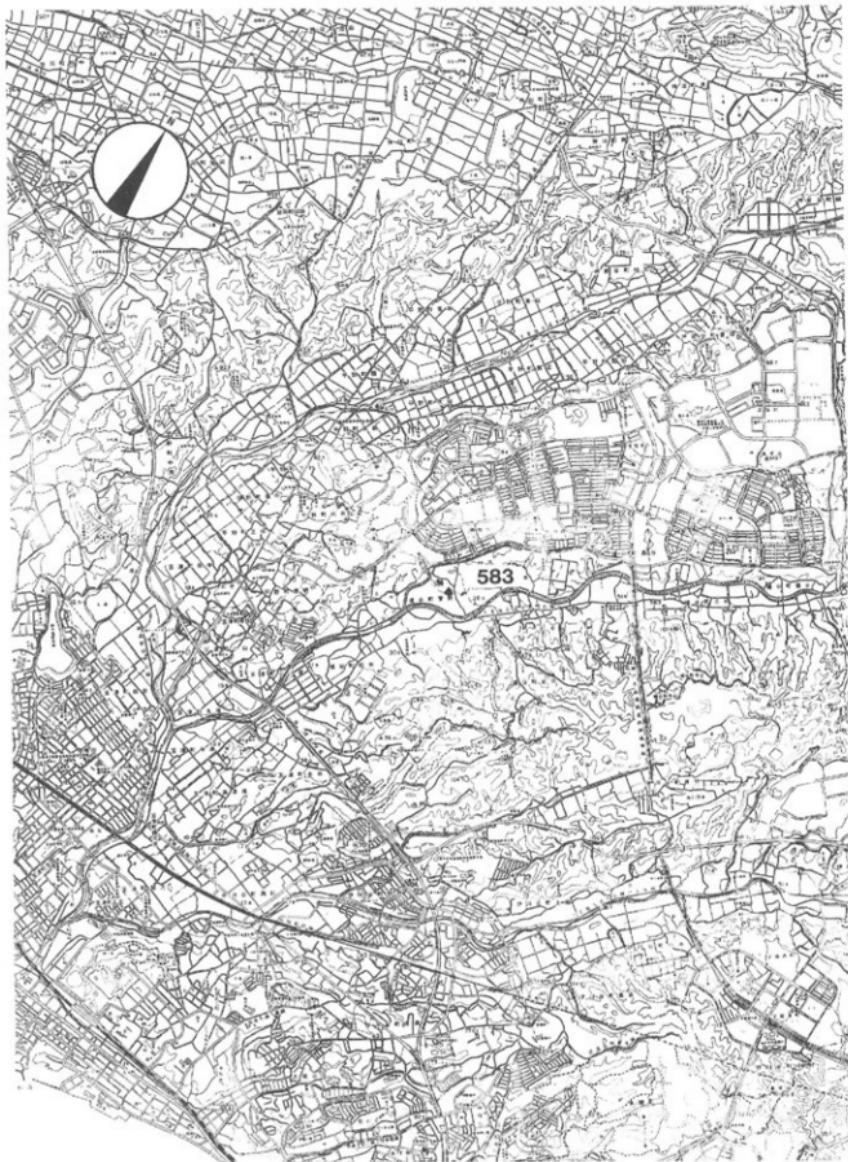


fig. 582 西区試験地域全体図



fig. 583 菅野地区試掘調査地点 (S = 1 / 5,000)

V. 平成7年度の保存科学調査・作業の概要

本年度も遺物と遺構の活用を計るために、保存科学による調査と作業を継続して行っている。しかし、震災の影響で発掘調査そのものがより緊急性の高いものになり、調査件数の増加に伴い、保存処理を必要とする遺物の出土量も増加している。そのために、これまで以上に十分な処置を行うことができなくなり、大半は応急的な劣化防止の処置を行い、仮保管せざるを得ない状況になった。

1. 遺物に関する保存科学

脆弱遺物の

取り上げ

遺物の損傷や劣化が著しく、手で取り上げようすると壊れる可能性の高いものについては、調査現場で出土状況を記録した後に、周囲の土ごとウレタンフォームで包みこんで取り上げを行った。

本山遺跡

第17次

弥生時代前期の河川跡から、ツル状の植物で編み込んだ、カゴ状の断片6点と網の枠木状の断片2点が出土した。いずれも辛うじて形状を保っているものの、腐朽が進んでおりそのまま手で取り上げることができなかった。これらを壊さないように取り上げるためにそれぞれの周囲を掘り下げて、ウレタンフォームをその周囲全体に発泡させて包み込んで取り上げを行った。室内に持ち込んでから、周囲の土や硬質発泡ウレタンを取り除き、観察、撮影を行っている。

上名田遺跡

第16次

土壌墓内の漆製品を同様の方法で取り上げを行った。



fig. 584 出土状況 (周囲を掘り下げる)



fig. 585 ウレタンフォームの原液を吹きつけ発泡させる

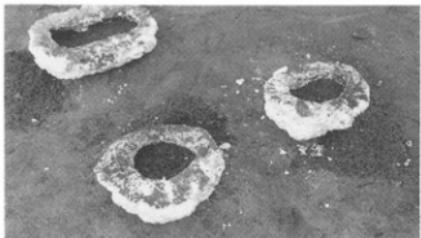


fig. 586 ウレタンフォーム硬化後にひっくりかえす



fig. 587 室内に持ち込んで慎重に洗う

金属器 今年度は23遺跡から約320点の金属器が出土している。順次、洗浄と台帳作成を行い、仮梱包を行い、特別収蔵庫で仮保管を行っている。

鉄製品のうち、腐朽の可能性の高いものから、観察図の作成、処理前写真、第1次サビ落とし、水酸化リチウムによる第1次脱塩処理の行程で保存のための処置を行っている。青銅製品については、ベンゾトリアゾールによる防錆処置を施している。

**篠原遺跡
第12次** 弥生時代後期に属する青銅鏡が出土している。鈕を含む全体の半分強と、外縁の小片が残存している。櫛歯文などの凹部に、僅かに赤色顔料が付着している。このことから、埋蔵以前の保管時か、この鏡を使用する際に、赤色顔料が鏡背のほぼ全面に塗られていたことが推定できる。

X線ラジオグラフィーによる観察では、腐食はほぼ均一に進行していることや、鋳造ムラなどはほとんどなく、高度な製作技術であったことが窺える。表面は全体的に緑色、部分的に緑灰色を呈する。一部に使用痕の傷が確認出来ることから、本米の面のまま鋳化したものと考えられる。肉眼レベルでは、サビによる膨れや陥没は見られない。破断面では、中心部は赤銅色をしているが、これが製作時の色調であるのか、赤銅鉱に変化したものかは、今後のX線回折分析などの調査が必要である。

松本遺跡 弥生時代後半から古墳時代にかけての時期の包含層から、青銅鏡が1面出土している。鏡面鏡背とともにややくすんだ赤銅色で、ほとんどサビの付着は肉眼では認められない。この色調が本米のものであるかは、組成分析のための調査を経なければ判断できない。断面は薄く、紋様も浅い。顕微鏡観察では、全体的には細かな凸凹があり荒れているが、鋭角的ではなく滑らかである。

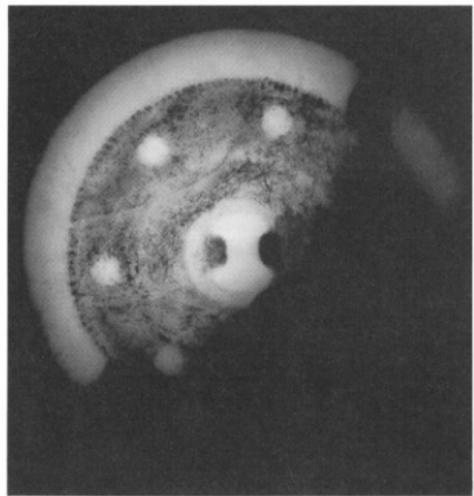


fig. 588 篠原遺跡出土鏡X線ラジオグラフィ
80kvp 3mA 1min 30sec

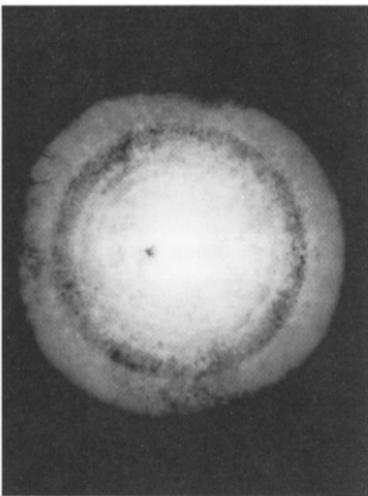


fig. 589 松本遺跡出土鏡X線ラジオグラフィ
80kvp 3mA 1min 30sec

淡河萩原城 近世に築かれた石垣から刀子が出土している。他にも寛永通宝や煙管などの銅製品や釘などの鉄製品が出土している。小柄はサビの状態から、身が鉄製で柄は銅製と見られる。

寒風遺跡 第1次 10世紀後半の鍛冶炉と推定される遺構が検出され、14点の鉱滓やフィゴの羽口が集中的に出土している。さらに50点以上の各種の釘や鉄鎌状の製品も同様の分布で出土している。他の遺物から官衙の様相の強い遺跡と考えられており、鉱滓や金属器の集中的出土と鍛冶炉が検出されたことは、この一画が地方官衙内の小規模な工房の1つであったことを推測させる。鉱滓の分析調査の結果も、鉄製品を加工していたことを裏付けている。

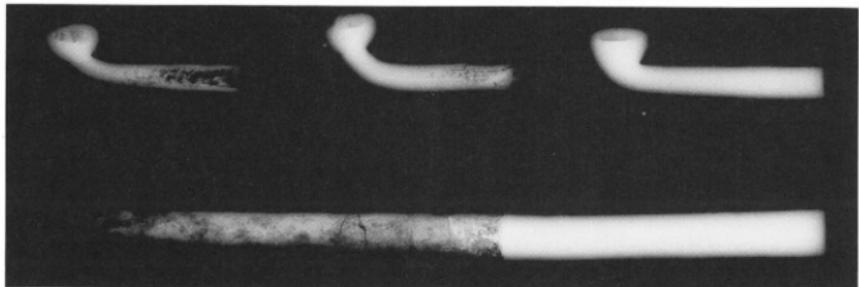


fig. 590 淡河萩原城出土煙管・刀子X線ラジオグラフィ

狩口台 前年度より、国庫補助で保存処理を行っている。本年度は、金銅装馬具を中心に保存処

きつね塚古墳 置を行った。いずれも、水酸化リチウムによる脱塩後に十分にアルコール洗浄を行い、その後顕微鏡下で慎重にサビの除去を行った。さらに2~3回同様の脱塩行程を繰り返している。一部の鍍金が健全な部分については、EDTAを用いたサビの除去も行った。剥離しあけている鍍金は、シアノクリレート系合成樹脂で固定を行っている。

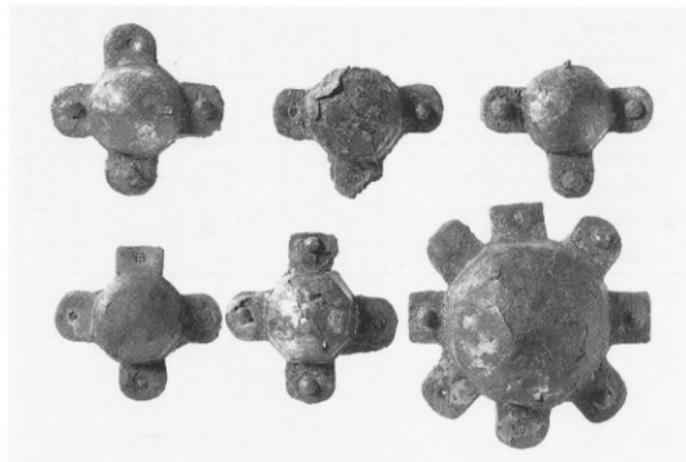


fig. 591 狩口台きつね塚古墳処理後金銅装馬具

木製品

本年度も継続してポリエチレングリコール（PEG）含浸により木製品の保存処理を行っている。しかし、震災後は特に低湿地での調査が急増し、それに伴い木質遺物の出土点数も増加しており、順次作業を進めているが、出土量に追いつかない状態にある。そのため、水洗後はその大半を空気透過率の低いシートでの梱包を行い、仮保管しているのが現状である。なお、本年度から保存処理の時間短縮等を目的として、小型真空凍結乾燥機1台を設置した。

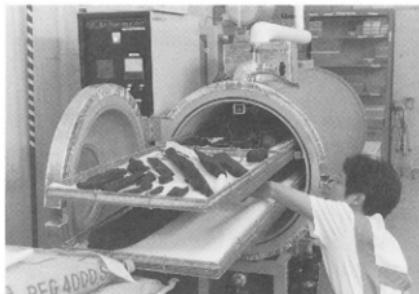


fig. 592 真空凍結乾燥機による木製品の保存処理



fig. 593 PEG含浸後、アルコールで表面を洗浄する

材質及び

本年度は、下記の材質及び古環境の調査を、外部に委託して行った。それぞれのデータ
古環境調査 およびプレバラート等は、文化財課が保管している。

調査名	残留脂肪酸	木製品樹種	土器胎土	花粉	種実	プラントオパール
上小名田遺跡第14次		5点				
上小名田遺跡第15次		87点			4ブロック	
長田野田遺跡		8点				
玉津田中遺跡		646点				
大田町遺跡	5点	59点			3ブロック	
菅野遺跡（松本）		83点				
本山遺跡第17次		154点		4点	2ブロック	1ブロック
戎町遺跡第14次		65点			2ブロック	
舞子浜遺跡			49点			
柄木遺跡（小部明石線）		20点				

平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報

額価 2,800 円

平成10年3月 印刷

平成10年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

電 078(322)5798

印 刷 ㈱アロエ印刷

神戸市中央区中町通2丁目3番8号

電 078(371)3831

広報印刷物登録・平成9年度 第294号 A-6類



本書は、再生紙を使用しています。